

# 縦の木の子孫たち 第二部



新しい世が来る！

小城ゆり子

## (1) 惣左衛門の決断

高橋家では、かよと婚約した慎次郎が、明るく朗らかに踊りまくっていて、長男のはずの壮太郎が家の隅に小さくなっていた。彼は悲しかった。冬、自分が乳母のおなかの家でごろごろしていたとき、弟の慎次郎は深い雪の中をあちこち歩き回って、燃える水を探していたのだ。

「だから、俺、しょうがねえと思いますて」

と、彼は言う。

「いっつも、俺、慎次郎に負け通しで、これまで勝ったことなんていっぺんもねえんですて。それも、俺がのんきでいいかげんな人間だからで、そう思うと、俺、なおさら悲しゅうて、悲しゅうて」

義母のおくみに訴える。

「それでも、おっか様、俺のかよへの思いは本物なんですて」

そう言う義理の息子に、おくみは

「ありがとう、壮太郎さん。かよを好きになってくれて、ほんとにありがとね」

と感謝する。

「私は、実は、かよがこの家の兄弟にうまくとけこむことができるかどうか、それが心配だったんよ。壮太郎さんも、これから先も、かよを妹として大事にしてやってね」

「妹……」

妹はゆみであった。俺は、かよを妹にしたいわけではない、と壮太郎は思う。しかし、公の場で、慎次郎がかよの許婚者と決まった以上、ここは男としてさっぱりあきらめなければならない。

その上、父の惣左衛門まで、あんにゃのはずの自分に、なんとも理不尽なことを言うのだ。自分はそれでなくても落胆しているというのに。

「壮太郎や、お前には気の毒だが、この家は、次男の慎次郎に継がせたいんじゃ」

「?……」

「実は、前から思っていたことなんじゃが、かよは、世が世なら、お姫様じゃ。身分の高いお侍の娘御で、父御は、罪を得ておしまいになったが、自分一人の幸せよりも藩全体の人々の幸せを願って、身を粉にして戦いなさった方じゃ。その尊い血を引くかよを、高橋の本家の女主人にしたいんじゃ。この家を、苗字は高橋でも、原田様の末裔として、これからずっと、先々、盛り立てていきたいんじゃ。

ところが、そのためには、かよと婚約した慎次郎を本家の当主にしなければならん。な、このわしのわがまを聞いてくれんか？」

「……」

「その代わりとってはなんだが、お前には、今開墾している高橋新田の三分の一を与えて、一の分家としよう。あと三分の二を、東三郎と正四郎にそれぞれ与え、二の分家、三の分家としよう。こうして高橋家を立派に栄えさせたいんじゃ」

「分家のことは、ええです」

「そうか。お前は、やはり、かよのことをあきらめきれんか？ まあな、かよが二人いればい

いが、あいにく一人しかおらんでの。じゃから、わしが一つ、大奮発して、三国一の花嫁を探してやろう」

「探す？ どうやって探すんで？」

「うんにゃ、俺は、困ったときにはいつも、米問屋の鈴正さんを頼りにするんじや。今は、春。稲の苗付けで忙しいときじゃから、これが一段落したら、お前共々、鈴正へ行こう。それとも、お前、もっと他に良い女がおるんかい？」

「うんにゃ、いねえです」

「では、そうしよう」

鈴正の主人は、目を丸くした。

「お前さん宅では、もしかあんにゃに家を継がせるだけか？ あんにゃがここに、こんなに元気でおるのに」

「いやあ、これにはいろいろわけがあつて」

「いろいろのう？……」

「かよつていう、あの娘が」

「ああ、あの養女」

「うん、そのかよが、次男と結婚することになったんじや。かよが女主人だとの、家の格があがるがね。で、次男を跡取りにして」

「ふーん」

「そこで、困ったのが、この壮太郎の嫁での。これももう二十二歳、早く嫁を見つけてやらんば。で、どこぞにかよより良い、三国一の花嫁はおらんかね？」

「三国一の花嫁ねえ……」

「できれば、お武家の」

「お武家？」

「うん」

「お前様はいつもお武家が好きじやのう」

「へえ、そういうわけで」

「わかった。この長岡藩にも、娘を町人や百姓に嫁入りさせたいと思つとる、下っ端のお武家様は、いっぱいおられるから、頼んでみよう」

「ありがとうございます」

高橋家のある貝喰新田は、長岡藩の土地の中を飛び地している幕府領である。そのため、お代官とその家来はいるが、数は少ない。また、彼らは幕府直轄の家来だからと、気位が高いのだ。貧乏侍でも誇りたかく、とりつくしまもないのだ。

「あんにゃ、心配なさらんでいい。このわしが、必ず、三国一の花嫁を見つけてあげるで。で、どんな女子がお望みで？」

壮太郎に問う。

「俺、みめかたちは十人並みでええです。その代わり、賢い娘がええです」

「ええ」

「ふーん、賢いねえ」

「字が書けて、書を読める」

「はあ、読み書きねえ。これは、だったら、百姓娘ではだめなわけですね。じゃ、わしがちゃんとお望み通りの武家娘を探しだしますで。安心して待ってくらっしゃれや」

「はあ」

「結納はちゃんと収めますで」

と、父親の惣左衛門がはっきりと言う。ここは重要なところだ。

「持参金などはもちろんのこと、嫁入り仕度も、何にもいりませんで。身一つで来てくらっしゃれば」

庄屋の惣左衛門は、金で、武家娘をもらおうと思っているわけであった。

三人が話していると、そこへ、一人の男の子がやってきた。

「おとつあま、小遣いをくませえ」

と、金の催促。

「ああ、進介か。小遣い、何に使うだ？」

「もうじき祭りがあるで」

「そうか、そうだな」

鈴正の主人が、男の子にお金を渡す。

「あ、失礼しましたな。この子が、うちの長男で、進介といいます。わしも、長い間、子宝に恵まれませなんだが、先年、ようやく、子ができて。もうわしもかかも、この子がかわゆうて、かわゆうて。この子もお前さんとこの、その、なんといいましたかな、末のお嬢ちゃん」

「ゆみといいます」

「そう、そのゆみちゃんと同じく、四十の恥かきっ子ですて」

主人は、恥ずかしそうに笑っている。

「そうですか。めでてえことですね」

惣左衛門は、自分のところのゆみを思う。

そこで、本題。鈴正が、

「じゃあ、今年の稲刈りが無事終わって、お前さんたちがここへ米を無事運んできてくれるときまでには、候補者を見つけておきますて」

と請合う。

この年の秋。惣左衛門と壮太郎とは、集めた年貢を代官所に納め、小作料のうちの現金に換える分を持って、鈴正に向かった。話の続きは？

鈴正は、長岡藩の下級武士、寺田家の五女、たつをどうか、と言う。

「なにしろ、寺田様は無役な上に、貧乏人の子だくさんで、しかもそれが女の子が多く、とても嫁入り支度などできず、困っておられるんで。しかし、この五女、たつ殿は、器量こそ十人並だが、読み書きそろばんが抜群に良く、藩でも有名になっておりますて。これなら、三国一の花嫁で、そのかよさんとやらにも負けませんで」

太鼓判を押す。

壮太郎はもちろん、承知である。彼は、自分があまりできのいい方でないので、賢い嫁がほしかったのだ。

その年は、豊作だった。

収穫を祝う晩秋のある日、寺田たつが、高橋家に嫁入りしてきた。

惣左衛門は、長男の壮太郎を分家に出すという負い目があって、その埋め合わせに、盛大な婚礼をあげてやった。親類縁者のほか、村の人々も呼んだ。

惣左衛門自身は、高橋の本家の一人息子で、姉妹はいたが、それぞれ嫁に行った。で、彼はすんなりと家を継いだのだ。その後、彼の先妻が男の子四人を産んだ。その亡くなったあと、おくみがかよを連れてきて、末娘ゆみを産んだ。この目に入れても痛くない末娘は、鈴正の跡取り息子・進介に嫁がせたい、と彼は秘かに考えていた。

かよは、自分よりも賢いたつが嫁に来るというので、一緒に遊べると、楽しみにしていた。

だが、たつは、嫁入りの翌日から、朝早く起き、女主人のおくみの指示通り、きびきびと働いた。

つままないなあ、と、たつと遊んでもらえないかよは、不満だった。

たつは、いつも忙しく働いている。たまりかねたかよが、

「ね、姉さん、遊びましょ」

と誘っても、たつは、

「俺は嫁。お前様はここのお嬢様。えれえ違いです」

と言って、相手にしない。

「読み書きが得意だって聞いたけれど」

と、かよが言っても、

「嫁になったら、そげなことはできねえです」

と、にべもない。

やがて冬がきて、長い雪ごもりが終わった頃、たつは身ごもっていた。

惣左衛門は、大喜びで、壮太郎たちに家を造ってやる。

そして、皆々待ちかねた、かよと慎次郎との婚礼の日が来た。

江戸の雁屋から、すばらしい花嫁道具が届く。雁屋の三人の娘たちも、それぞれ結婚して、幸せになっている、と便りがあった。

やがて惣左衛門はその秘かな期待通り、東三郎の二の分家、正四郎の三の分家が首尾よくできた後、少女になったゆみを鈴正の進介に嫁がせることができた。

## (2) かよの決断

かよは、十五歳で晴れて高橋慎次郎と結婚した。慎次郎は二十歳になっていた。初め、まだかよは、年が若く、身体が女として成熟していなかったのか、数年の間、子に恵まれなかった。

一の分家の壮太郎のところには、早くも男の子が生まれ、その二年後には女の子も生まれ、惣左衛門は孫たちにかこまれて、喜んでいた。幸せな家族。たつは金でもらわれてきた嫁であったが、壮太郎と仲のいい夫婦になった。

おくみも年をとっていた。もうじき四十代も終わり、五十代に入る。今は色香よりも、成熟した女の魅力があった。かよとゆみ、二人の娘の母親である。

この母に早く孫を抱かせたい、とかよも思わないでもない。母は幸福だったのだろうか？ 原田のようは、当然、国許に奥様がいらっしゃったし、江戸勤務のときも、ほとんど湯島の家には来てくれなかった。母とは縁の薄い方だった……。そして母は、罪を受けたとう様の血を引く娘の私を守るため、遠く越後に嫁いできた。生きぬ仲の四人の兄たちを育て、妹のゆみも産んだ。母は幸せであったのだろうか？

おくみの幸せ……。結婚していてもまだ若いかよには、考えてもわからない。早く初孫を、と思うのだが。

かよは、夕食のとき、突然吐き気がして、台所に逃げ込んだ。吐いている自分の姿を、今、食事している家族に見せてはならない。なんとかしなければ……。

台所で苦しんでいるかよのそばに、母のおくみがやってきた。

「かよさん」

と母が娘を呼ぶ。

「かよさん、月のものはあったの？」

「えっ？」

「月のもの、しばらく、ないんじゃない？」

「ええ、それは……あたし……」

「それって、赤ちゃん？」

「えっ？」

かよは驚く。彼女にとって、初めての体験である。

「早くお産婆さんに診てもらわなくてはね。でも、良かったわね、かよさん」

「かあ様、うれしい！」

飛び上がって喜ぶ彼女のもとに、夫の慎次郎がやってきた。

「えっ、赤ん坊だって？」

「え、そうかもね、まだわからないのだけれど」

「そうか。赤ん坊か。名前は何と付けようか？」

「まあ、気の早い」

「だって、早く考えてやらねば」

「まだ、男か女かもわからないのに」

「男か女かって、それはどちらでもいいよ。俺たちは、まだ若いんだ。これから先、子供は何人も産めるさ」

家中、うれしさにわいてくる。

次の日、呼ばれてやってきた村の産婆は、かよの状態を診て、まちがいなく妊娠している、と告げた

。

おくみは、そっと心の中にしまっている幻の仏壇の、甲斐に告げる。

「お殿様、私たちの孫が、とうとうできましたよ。ご本家の奥様のお産みになった息子様たちも、お孫様たちも、命を召されておしまいになったけれど、貴方の血は、こうしてかよとその子供たちに受け継がれていくのです」

こうしてかよは、男児を産んだ。

惣左衛門は、この家を継ぐこの子を、時太郎と名づけた。

「時太郎ちゃん、いい子、いい子」

と、かよと、時太郎の乳母、よしのが、この赤子のおしめを替えてやっていると、それを偶然、女衆のみかが見て、泣いた。

「あら、みかさ、何を泣いているの？」

かよが不審がる。『みかさ』とは方言で『みかさん』のこと。

「かよ様、俺、だって、だって。俺とあんまり違いすぎて……」

みかは、顔をくしゃくしゃにして、泣いている。彼女のお腹も大きい。男衆の佐七が、彼女の夫である。

「あんまり違いすぎる？」

「え、ええ、俺、かよ様たちがうらやましゅうて、うらやましゅうて」

「みかさ、かよ様に失礼ですよ」

と乳母のよしのが、みかをたしなめたが、かよはそれを制した。

「あら、いいのよ、みかさ、何でもしゃべっていいのよ。いったい何を言いたいなの？」

「俺、慎次郎様と、かよ様と、時太郎坊ちゃまとが、三人で楽しそうになさっているその姿を見ると、うらやましゅうて……つらくて、思わず泣いてしまつて……。それは、俺たち下人が若奥様たちと違うのは、わかります。でも、これではあんまり違いすぎて……。俺と亭主とは、みんな一緒の下人部屋で、この子を身ごもるのも、皆に遠慮しいいで。それでこの子が無事産まれても、三人家族にはなれねえで……。俺、それがつれえです」

みかは、産まれてくる子と、夫と、三人で暮す家庭の幸せに飢えているのだった。

そうだった。かよは、これまで、自分たちのことしか考えず、下人の気持ちなど考えたこともなかった。これがいけないのだと、彼女は気づく。

「そう、わかった」

その夜、かよは、慎次郎にみかたちの話をした。

「あたし、もうしわけなくて……自分たちばかりが幸せで。あたしたちも、下人たちも、同じ人間じゃない。あたしたちだけが家庭を持って、みかさは佐七と夫婦になつても、家庭の幸せを得られない、こんなの、不公平だと思わない？」

「それで、どうすると言うんだい？」

「あの人たちに、土地を受け持たせ、家も作らせ、下人ではなく、小作人にしてあげたら？ あたしたちは、小作料がもらえれば、いいわけだから」

もちろん、高橋家にはもともと大勢の小作人がいる。このほかに、下人の男衆、女衆が、いるわけであった。

「わかった。おとつあまに話してみよう」

慎次郎は請合う。

惣左衛門は、目を丸くした。

「何？ みかと左七を小作人に？」

「ええ、他の下人も、結婚したら小作人にしてやりてえです」

「そうか」

「そうしたら、佐七たちも、今より二倍も三倍も精出して働くだろうし、うちは年貢と小作料とを収めてもらえばええわけだし」

「うーん」

「どうでしょう？」

「それは、お前の考えではねえな」

「えっ？」

「かよの考えじゃろう」

「……」

「違うか？」

「いや、その……」

「凶星じゃな」

「ええ、それは……」

「まあ、いい」

惣左衛門は笑った。

「下人を小作人にするって、この家は、いずれお前とかよの家になるのじゃから、お前たちの自由にしていんだ。わしに遠慮することはねえぞ。好きにしろ」

「へえ？」

佐七とみかは、飛び上がって喜んだ。

「あ、ありがとうございます」

みかは、感謝のあまり、女主人のかよの手をとって泣いた。

「かよ様、これで俺たち、親子三人で暮せますだ。もう夢を見ているようで」

「そう？ これからは、お前さんたちが働いて、収穫したものは、年貢と小作米とを収めてくれれば、あとは、自分たちの好きなようにしてええんよ。また、米以外の作物は、当然自分の好きにしていし、働き甲斐があっていいでしょ」

かよはみかをはげます。

こうして高橋家は、下人を小作人にしていった。そのため、自由を得た彼らは良く働き、生産性も向上した。しかし、これは、彼らにとって、良いことばかりではなかったのである。



### (3) 天保の飢饉

---

江戸時代は、気候が寒冷であった。そのため、東北地方を中心に、冷害・旱害が何度も起きた。約二百六十年の間、何度も凶作から飢饉になった。それ以前の中世社会でも、凶作や飢饉はあったが、それが江戸時代には、本格的になった。

それは、農民が米以外の作物を作り、市場経済に組み込まれたため、社会全体として豊かにはなったのだが、ひとたび不作、凶作が起きると、米の絶対量が足りなくなる。そういうとき、農民は年貢を納め、小作料を納めると、あと、自分たちが一年間食いつなげるだけの米が残らず、窮したのである。

貝喰新田は、越後の米どころ、米作りには非常に恵まれたところにある。信濃川水系の河川のうち、貝喰川のほとりにあって、ふだんは豊かなところであった。台風や大雨で河川が氾濫し、水田が水浸しになることはあったが。

天保四年から十年にかけて（一八三三年―一三九年）長雨、寒冷、虫害などが次々と重なり、全国的な凶作で、飢饉が続いた。これが天保の飢饉と呼ばれている。

貝喰新田の高橋家では、慎次郎とかよの時代からはや半世紀も過ぎ、この時代は高橋八衛門が当主であった。

他の時代ならともかく、この天保年間に庄屋になって、八衛門はとても困っていた。庄屋の仕事は年貢を集め、領主に収めることなのに、それがなかなか集まらない。わずかばかりの収穫の米を、農民たちは素直に年貢に差し出そうとしない。自分たちの食べる分にも事欠くのだ。が、凶作だからといって、公儀への年貢米もまた小作料（高橋家の取り分）も農民たちから力ででも奪わなければ、この社会は成り立たないのだ。高橋家の番頭は、体格のいい強い男で、農民たちに有無を言わず、米を取り立てた。

それでも年貢米が不足し、八衛門はしかたなく、小作米をけずり、年貢米に立て替えてやった。翌年は、この分も百姓から取り立てるのだ。

凶作が続く、全国の百姓が困っていたが、支配階級の武士たちは、儉約生活をしていても、飢えることはなかった。これが、封建社会の仕組みである。

飢えた百姓たちは、開墾されずに残っている野や荒地に行き、食べられそうな野草を摘んでくる。蛙などが跳びはねていれば、これも食う。川の貝や魚を捕まえて食べる。ひどい窮状だが、原始時代に戻っただけとも言える。

今一つ問題なのは、越後は雪国だということだ。冬の間、越後は雪に閉ざされてしまう。秋の間に百姓たちは、木の実や草の葉を集めておくのだが、それも、長い冬の間には、食い尽くしてしまう。春になれば、田植えが始まり、大事に残しておいた種籾をまく。空腹に耐えられず、種籾まで食べてしまったら、万事休すである。

高橋家の小作人・万助の家では、食べられるものならみな食べつくし、一家四人、飢餓から逃れられなかった。

で、万助は、妻と二人の娘を連れ、庄屋屋敷にやってきた。

番頭が、小作人の万助が家族連れでやってきて、何か用があるらしいと言うので、八衛門はいぶかしげに、屋敷の裏口に向かった。

見ると、万助も、まだ若い妻も、幼い娘二人も、やせ衰えて、骨と皮ばかりになっている。醜い飢人の姿であった。

妻などは、これが生きた女かと疑われるほど、醜く、髪がぼうぼうとして、着ているものもぼろぼろのわら造りで、はっきり言えば、まるで幽霊のようだ。娘たち二人も、目ばかりぎょろぎょろと大きく、少しもかわいげがない。この一家、粗末なわらごろもなど着て、寒さに震えている。

「何だ？ 何の用だ？」

八衛門は、また、米を少し分けてほしい、という要求かと思った。年がら年中、村の百姓たちがやってきて、米をねだる。こちらも貧しいのに、うるさいくらいだ。

しかし、万助のは、思いがけない要求であった。

「へえ……実は、だんな様に、この俺の妻と娘らを買ってもらいてえんで」

「妻と娘を？」

「へえ」

「何だと？ いつ、わしが人買いになった？」

「いえ……俺、もう家に食うもんが何もねえで、田植えする種籾も、もうとつくにねえで……このまんま春がきても、夫婦親子共々飢え死にするしかねえんで」

「自分のところには、食べ物がねえから、わしに、妻子を食わせてほしいって言うんか？」

「へえ……まあ、そうで」

「言っておくが、わしは、ここにおるお前の妻や娘を見ても、何の魅力も感じねえぞ。女郎屋さえ買ってくれねえような女どもでねえか」

「へえ……あの、下女にでもしてくだせえ」

「下女か。しかし、うちでは人手も足りているし、家の者にやる食べ物もあとわずかで、自分たちが食うていだけで精一杯なんじゃ。とてもお前たちだけに情けををかけてやるわけにはいかんのじゃ」

「だんな様、そこを何とか」

「妻子を売ったわずかな金で、食いつなぐ。食いつないで、その金も底をついたら、お前、そのときはいったいどうするんじゃ？」

「へえ、俺は、江戸へ出ますて」

「江戸へ？ 江戸へ出て、何をするんだ？」

「へえ、俺は、乞食になりますて」

「乞食になる！」

「へえ」

八衛門はあきれてしまう。

「下女とか、乞食とか……お前、昔、ここに高橋慎次郎様とかよ様とがおらっしゃった頃、そのお二人に解放されて小作人してもろうた下人の末ではねえけ？」

「へえ、まあ、そうで……」

「せっかく解放してもらい、自由になれたのに、どうしてお前はまたもや下女だの乞食だのって

言うんだ？ 下人のままだったら、良かったのか？」

「へえ」

「そうか。下人なら、食い物はわしが心配するから、自分たちはわしに従っているだけでいい、気楽な身分なんだな」

「へえ」

いちいち肯定する万助。八衛門はもうあきれっぱなしである。

「米の不作、凶作のときはある。お天道様のやらっしゃることは、しょうがない。だから日頃からそれに備えて、救荒食を蓄えておくのだ。お前は、稗や粟は、作付けしたか？」

「いや、それは……」

「何だ。いつもわしが口をすっぱくして言っておったではねえか。米を作るのは当然だが、自家用の米がのうなってしまった時のため、必ず、田畑の片隅には稗や粟を植えておけ、と繰り返したのではねえか。それをしなかったんじゃな。それをしないで、米も、美味で高く売れる品種ばかり育て、冷害や早魃に強い米を作付けしなかったのじゃな？」

「へえ」

「あきれた野郎だ。甘藷は植えたか？ 甘藷は荒地にも育つし、美味で、米の代わりにもなるし、茎や葉も食べられるのじゃぞ。お前、甘藷は植えても、芋だけしか食べず、茎や葉は捨てたんでねえか？」

「へえ」

「あきれて、話にならん。つまり、お前は金になる品種の米ばかり作って、それを売り、金を得て、喜んでいたのじゃろう？ そんな、金、金、金ばかり。百姓が商人のまねなどしてはならんと、いつもわしが言うておったじゃねえか」

「へえ」

「いや、金のほしいのはわかる。じゃが、凶作のときの備えもしておかんと、いったん凶作が起こると飢饉になってしまうんじゃ。わしはそれを言うておる。ま、百姓たちにいちいち指導するのも、わしの、庄屋としての役目かもしれんがの」

「へえ」

「が、もうじき、雪が解けて、春になる。野や荒地の雑草も雪の下から芽を出してくるじゃろう。貝喰川の魚や貝もある。それら救荒食をとって、春をしのぐのじゃ。今年の飢饉は酷いから、お救米を施粥してもらえよう、お代官様に願い出してみよう。ここの土地は、ご公儀のもの、幕領じゃからのう。じゃが、これに甘えてはならんぞ」

「へえ」

「雪が解けたら、水田に苗を植えるんじゃ。種粃は、わしがこの日のためにとっておいた物があるんで、皆にそれを貸してやろう。秋になって、収穫があつたら、返してくれればいい。しかし、今年は豊作かのう？ できればそう願いたいものじゃが、また不作でも困らぬよう、今度は稗、粟も、植えつけておくのじゃぞ。甘藷も忘れぬようにな」

「へえ」

「妻子を売るなどと、考えてはならん。そんなことを女衞が聞いたら、何とする。家族そろって、働き、なんとかこの飢饉から逃れるのじゃ。生きることを考えるのじゃ」

「へえ」

百姓の万助の目から涙がにじり出る。

「俺、もうしわけねえです。ごめんなせえ。大切な妻や娘を売ることなど考えて。俺、たいへんなバカでやんした」

「そうじゃな。もっと賢く、考えなければならんな。農事のことを書いた本も、今、いろいろ出ているようだ。それを手に入れて、読まなければ。百姓にも読み書きそろばんが必要だな」

「へえ、俺は読み書きもできねえで、肝心な農業も人並みにやれねえで、すまんこってす。庄屋様に教えてもらいました」

「そうか。もう二度と、妻子を売るとか、乞食になるとか、そういうことを考えてはならんぞ」

「へい、わかりやした」

万助は、納得した。彼の妻と娘たちも、救われたとわかって、とたんに表情が明るくなった。

そして、幸せになったこの家族は、庄屋屋敷を辞した。

天保の飢饉は、何年も続いた。百姓たちは、米の売り惜しみをする米屋を襲ってうちこわした。幕府の役人であった大塩平八郎が幕府に抗議して反乱を起こした。越後にも彼に呼応する者がいた。その他、さまざまな飢餓地獄もあって、やっと米の平年作に戻った。

高橋家は、立派な庄屋（村方役人）であった。それは昔、惣左衛門が、原田甲斐の血を引くかよを女主人にした、その意図がうまく当たったのである。

## (4) 寺子屋

ゆきのは、高橋八衛門にとって、たった一人のかわいい孫であった。

彼には亡くなった妻との間に、二男一女があったが、次男の虎次郎は変わり者。なにやらわけのわからぬ理屈を言って、他国に出奔したまま、便りもない。嫁に行った娘には子がない。跡を継いだ長男・庄太郎には、子供は五人もできたのだが、そのうち四人とも乳児の頃に亡くなっている。この時代はまだ、乳幼児を育てるのが難しく、子供を大切に育てても亡くなってしまうのは、よくあることであった。

そういうわけで、八衛門には、庄太郎と嫁・よねの間に産まれた末っ子のゆきのだけが、孫として残されている。

飢饉の酷かった天保年間も、やっとのことで済み、世は弘化（一八四四—四七年）から嘉永（一八四八—五三年）へと移ってきた。庄屋の仕事を庄太郎に譲った後、隠居の八衛門は、家で寺子屋を始めた。

ここで寺子屋のことについて、少しふれておこう。

江戸時代には子供たちの教育が盛んに行われ、明治維新の頃、日本人の識字率は非常に高く、これが日本の近代化を助けた。各藩の藩士たちを教育する学校は藩校と呼ばれ、百姓や町人など庶民の子弟を教育するところが寺子屋と呼ばれ、師匠（教師）は僧侶や武士（浪人）が多かった。

寺子屋の教科書は、往来物と呼ばれる書簡形式の書物で、多くの人々によって書かれ、その種類も多かった。農村の寺子屋では、『田舎往来』『農業往来』『百姓往来』などが使われ、農業の知識を教えた。

また、この時代、寺子屋の師匠は、教え子たち（筆子という）の一生の師であり、師匠が亡くなれば筆子たちが費用を出し合って墓（筆子塚）を作って感謝することもあった。

嘉永六年（一八五三年）は、アメリカ人ペリー提督が江戸近くの浦賀に来航し、幕府に開国を迫った年であるが、越後の片田舎に住む八衛門は、それは知らない。この時代、パソコン・テレビはもちろん、新聞・雑誌も、今日のような郵便も、何もない。あるのは、人から人への口伝えのみ。江戸では瓦版があって、民衆にニュースは伝わったが、ここはなにせ越後の片田舎である。そんな中でも、八衛門は、時代の変化を敏感に感じ取っていた。

幕府は長崎でのオランダ貿易の他は、鎖国して外国との交易を絶ち、そのことで列強からの侵略を防いでいた。二五〇年も二六〇年もそれを続けていたが、これは、もう限界にきていた。アメリカのみならず、イギリス、フランス、ロシア等の船が、近海に出没していた。

これは外国との関係のことだが、国内でも農村で諸産業が盛んになり、豊かな本百姓と貧しい水呑百姓（小作人）との農民層分解がすすんでいた。米だけで社会を維持する封建社会は、内部から崩壊し始めていた。

これからの百姓は、学問も身につけなければならない、と、天保の飢饉で辛酸をなめつくした庄屋の八衛門。百姓の子供たちを集めて、寺子屋を始めたのだ。

もともと、雪の深い越後では、半年は農作業ができないのだ。農民たちは、冬の間、わらで俵を作ったり縄をないだりしているが、農作業ができないのは、つらいのだ。これに着目した八衛

門は、百姓の子供たちを、冬の間、集めて、寺子屋を始めたわけである。読み書きそろばん、農業の方法なども教えた。子供は国の宝であり、未来を担う者である。大切に育てなければならない。

八衛門は直接には見ていないが、天保年間、飢えた民衆の間には、人肉を食らう者もあったそうだ。その反面、領主や庄屋がきちんと農民を育て、守っていた所では、人々は、凶作を何とか忍び、飢饉にはならなかったのである。

百姓にも学問を……。何か世の中が変わってきているらしい……。

冬の間のことだから、本百姓たちは、男の子たちを寺子屋に入れてくれる。女の子と、水呑百姓の子供たちは、どうか。理解のある親は、この子たちも寺子屋に入れた。その反面、今の今、食うにも困っているのだからと、わずかな月謝も惜しみ、子供に教育を受けさせようとしぬい親も多かった。

水呑百姓の女房、ぬいは、天保の頃、すんでのところまで飢えた父親に売られるところを八衛門に助けてもらった娘である。彼女が長男、次男、三男と、三人の男児を連れて、八衛門のところにやってきた。

「俺、庄屋様に助けてもろうて、ほんに命拾いしましたて。ありがとうございます。この恩は、決して忘れることはできませんえ」

と、ぬいは、深々と頭を下げる。

「これからも、恩返しもできず、お願いすることばかりで、もうしわけねえことですが……どうぞ、この子たち三人、それぞれ身の立つよう、学問を授けてやってくだせえ」

「ほほう、この三人か」

「へえ、上から佐助、加助、洋助と申します。ほら、お前たち、庄屋様に挨拶せえて」

ぬいにうながされ、三人の男児も深々と頭を下げる。

小作人の家では、次男、三男に分けてやれる土地はない。長男の他は、どこかに養子に行かなければ、村を出て町に行き、商人や職人になるしかない。ぬいは、息子たちを町にやる前に、その準備として、寺子屋に入れたのだ。

ゆきのと洋助は、仲のいい友だちになった。寺子屋で、抜群の成績である洋助。そして八衛門の一人っきりの孫娘・ゆきの。子供ながら仲がいい。

書道の時間、洋助がもじもじして言った。

「俺、筆を忘れてきたて」

「これ、あげる」

と、すぐにゆきのが自分の筆一本を隣の席の洋助に渡して、

「あたし、いっぺいあるから、返さんでええよ」

と言う。

洋助の家が貧しくて、新しい筆を買う金がないのを、ゆきのは知っていた。

子供たちが、あれこれと噂する。好きなんだ、洋助はお嬢様が好きなんだ、と彼をからかう。

相合傘を書き、洋助、ゆきの、と書いて笑う。

照れる洋助。

にこにこ聞いているゆきの。

ゆきのの両親・庄太郎とよねが心配する。

「お父様」

と、嫁のよねが、八衛門に相談する。

「ゆきののこっつすが、どうでしょう、一の分家の義三郎さんと許婚にして、この家を継がせてえんですが」

ゆきのと一の分家の三男・義三郎とは、年の頃もぴったりで、親戚のことで、話もしやすい。彼なら本家の婿養子としてふさわしい。何よりよねたちは、ゆきのが本気で洋助を恋したりしないよう、安全弁を作っておきたいのだ。

だが、八衛門にとっては、洋助も義三郎も、かわいい生徒である。江戸時代は、身分制社会だから、水呑百姓の子を庄屋の家の婿養子にすることはできない。だから、義三郎を婿養子に、ゆきのとめあわせては、というよねたちの考えは、それなりにわかる。しかし、である。まだ幼い少年少女のほのかに淡い思いを、土足で踏みにじることはできない。

「わしは、そういう考えには、あんまり賛成したくねえ。やるなら、お前たちだけでやれ、俺は知らねえ」

と、一応、つぶねる。

「ほんなら、俺たちだけでやりますて」

よねは宣言する。

庄太郎が一の分家に出向き、承諾を取ってきた。

「おとつあま、おつか様、何の用ですけ？」

両親に呼ばれたゆきのは、不審がる。

「ゆきの、お前の婿さを決めたて」

「えっ？」

「一の分家の三男・義三郎さじゃ。いずれこの家に来てもらうが、その年頃になったら、お前とめあわせる。じゃから、お前もそのつもりでいるように」

「義三郎さが、あたしの……」

「不服か？ 義三郎さでは、嫌か？」

「ううん、あの……」

ゆきのは、まだ、まだ、若い時代を遊びまわりたかったのだ。

学ぶことももっとたくさんあるように思える。

この両親よりも理解のありそうな祖父に、ゆきのは甘えて聞いてみる。

「おじいちゃまあ、ここで婿をとって家を継ぎ、庄屋の家を主婦として盛りたてて、子を産んで、死ぬ、それがあたしの人生かね？」

他に人生はねえのかね？」

「そうじゃよ、それがこの家の跡取り娘に生まれたお前の、人生じゃ」

「他の風には、生きられねえの？」

「他の風には？ ゆきのは、他の人生がほしいのかね？ いったいどういう風に生きてえ

んじゃ？」

「それは、まだ、わからねえけど……」

「そうじゃなあ、わしも、若いときは、自分にももっと違う人生があるんじゃないか、と悩みもした。じゃが、それは若い日の夢じゃ。人の一生は、産まれてきたときに、もう決まっているんじゃ」

「産まれてきたときに、もう決まっている？」

「ゆきのは、いっぺえ兄さや、姉さがいたが、皆、赤ん坊のときに死んでしもうた。育ったのは、お前だけじゃ。じゃから、お前は、わしらの家で、わしも、庄太郎、よねも、お前がかわゆうて、かわゆうて……かわいがって、甘やかしすぎたんかのう？……自分に与えられた生き方の大きさもわからず、他の生き方を夢見る、いつまでもそんな親不孝を考えていてはならんぞ」

「……」

ゆきには、わからない。なぜ自分には庄屋の主婦としての道以外の生き方はないのか。なぜ違う人生を夢見てはいけないのか。夢見るな、と祖父は言うが、現に祖父の次男・叔父虎次郎は、ここを脱出し、きままな人生を送っているではないか。これが親不孝だと祖父は言うが……。

ゆきのが、そんなことを思っていたとき、まさにそのとき、問題の虎次郎は、この家に向かって帰りの道を急いでいた。



## (5) 江戸の嵐、田舎の嵐

---

その年は、ことのほか、雪が多かった。冬になればいつも深い雪に閉ざされてしまう雪国であったが、年によって雪の多い少ないはあり、このときは一晩で二階建ての屋敷の屋根が雪で覆われてしまうほど、降ったのである。

ゆきのは、乳母のおちかと一緒に、玄関から公道への雪かきをしていた。毎日の雪かきは重くてつらい仕事であったが、しかし、これをしなければ、誰も外に出られない。

わらで編んだ長靴に足袋、木綿の羽織をはおって、雪かき用の大きなこてで懸命に雪かきをする。

足を滑らせて、

「あっ！」

とゆきのは、雪の上に転んでしまった。

と、そのとき、

「ただいま！」

一人の男が突然出てきて、挨拶する。

「あ、どなた？」

乳母のおちかが、不審げに聞く。

「どなたって、わしや、ここの息子だがや」

わらの衣をはおった中年男である。

「息子さん？……あの、庄太郎様の弟御ですかの？」

「そうじゃ、弟の虎次郎ださ」

「はあ、虎次郎様は、江戸でお暮らしと、お聞きしましたが」

「うん。その江戸で重大なことが起こったんで、故郷の皆に知らせに戻ってきたんじゃ」

「江戸で重大なこと？ それって、何のことでごぜえますか？」

「いや、それは後で、おとつあまに言おう」

そして虎次郎は、ゆきののこてをとって、雪かきを始める。

「叔父様、それは……」

「いいさ、いいさ、お屋敷のお嬢様が自ら雪かきでは、つらからう。こんな仕事は、叔父のわしがやってやる」

旅姿も解かないで、虎次郎が雪かきをしていると、そこへ小作人の小せがれ、洋助がやってきた。彼は、重労働の雪かきをやっているゆきのの身を案じて、かけつけたのだった。

「お嬢様、俺がやりますて」

と、持参した大きなこてで、深く雪をかく。やはり男は力が強い。

「おちかさは、屋敷に入っていいんですて。俺がやりますけに」

と、乳母にも言う。

人数がふえて、四人で楽しく雪かきをしていると、そこへ、もう一人、若者がやってきた。

一の分家の三男、義三郎である。

「洋助やい。ゆきのは俺の嫁と決まっているんだぞ」

と洋助を叱りとばす。

「なーんにも、俺、してねえです。ただゆきのお嬢様の雪かきのお手伝いをしていただけで」

「それが、よけいなことだって言ってるんだ」

義三郎は、やきもちをやいている。

「許婚の俺がしねえことを、なんで水呑百姓の小せがれがやるんだ」

「そんなら、もっと、お嬢様を大事にしなせえ」

「なんだと、こら！」

一触即発のけんかが始まる。

「こらこら、お前たち、やきもちをやいたり、けんかしたりするんでねえ」

虎次郎が二人を制する。

「今は、そんなつまらない争いをしていいときではねえんだ。江戸には黒船が来て、交易を迫り、ご公儀は困りに困っているんだて」

「黒船？ 何、それ？」

ゆきのたちより年上の乳母・おちかも、知らない。黒船って何だろう？

「ま、それは後で言います。黒船とは何か、後のお楽しみ」

笑いながら、四人そろって、雪かきをする。

八衛門は、息子が帰ってきて、うれしいはずであったが、そのうれしさは心の奥深くにしまっておき、外には表現しなかった。

「虎次郎、お前、江戸で何をして暮してたんだ？」

「それが、瓦版というものをこしらえまして、江戸の衆に読んでもらうて」

「瓦版？」

瓦版とは、当時の新聞みたいなものである。

「へえ、そこここで見聞きしたことを、書いて、刷って、皆に配って、おあしをいただくんで。中でも、黒船のことを書いたのは、よく売れましたなあ。その金で、俺も、ここへ一時帰る路銀もできたわけで」

「いつもは食い詰めていたんか？」

「へえ。ま、でも、瓦版もよく売れるし、そんな人に恥ずかしいことをしてたんではねえんで。ほら、ここに一枚、売らずに残しておいたのがありますが」

虎次郎が皆に見せる。紙に大きな黒い船の絵が書いてあり、文章が書いてある。

嘉永六年六月三日、アメリカのペリー提督が浦賀にやってきて、幕府に開国を迫った。この黒船たるや、今まで日本人が見たこともない蒸気船で、煙突からもうもうと煙をあげ。数十発の砲撃音を響かせる。皆、恐れたが、これは空砲だとわかった。挨拶のようなものらしい。

ペリーは幕府の責任者に、合衆国の大統領からの信書を手渡すと告げ、応対に出た下っ端役人には手渡せないと拒否。

やっと浦賀奉行が会見し、幕府は、あいにく将軍が病床にあり、鎖国を解くことを決定できないとし、また一年後に再来日してほしい、と返答。

ペリーは、ようやく去った。

と、まあ、こんなことが書いてある。

「これが、瓦版」

片田舎の一同、納得。

「で、その後は？」

「ペリーは、一年と待っていられず、半年過ぎ頃にまた来まして。病気の将軍様がお亡くなりになったことを、中国の香港あたりで聞き知ったんでしょ。新しい将軍も、頼りになる方ではなかったが、ともあれ幕府は日米和親条約を締結。ここで二百五十年以上続いた鎖国は終わったわけじゃ。

俺は、浦賀へ飛び、また、ペリーたちの上陸した横浜村に飛び、各地で取材して、瓦版をこしらえ、江戸の人々にそれを知らせたんです。これが俺の仕事。瓦版を印刷する技術ができて、俺の商売も繁盛してます。

「虎次郎、お前、その話をもちよっとくわしく、寺子屋で子供たちに話してくれねえか？ お前の話は、大事なことだな」

八衛門は虎次郎に頼む。虎次郎は、父親にものを頼まれたのは、これが初めてである。鼻高々に承知した。

虎次郎は、寺子屋の子供たちの心をつかんだ。皆、あこがれの江戸や黒船について知りたがる。

「黒船は、四隻で来た。二隻が蒸気船。あとの二隻は帆船だったが」

虎次郎が言うと、子供たちは、好奇心からざわざわする。

「蒸気船って、蒸気で動くんだかね？」

「そうだ」

「あの、お湯がスーッと出るときの蒸気で？ あんなもんで、船が動くんだかね？」

「うーむ、そこは難しいところじゃな。日本人には考えつかない発明が、アメリカやヨーロッパ各国にはあるんだろうなあ」

「アメリカ？ ヨーロッパ？ それは国の名だかね？」

「うん、そうだ。ヨーロッパには、イギリス、フランス、オランダ、スペイン、ポルトガル等、いろいろな国がある」

「へーえ。俺たち、この国しか知らなかったども」

「そうだな。この国のことも、よく知っているとも言えんな。この国を治めているのはご公儀と、わしもそう思ってきた。じゃが、将軍様の上には、京に天子様がおられるそうじゃ。天子様は攘夷主義者で、日米和親条約も認めておられんのだ。だから幕府も苦慮しておる」

そこで、洋助が聞く。

「黒船が来て、鎖国が解け、これから新しい世が来るんだかね？」

「そうだ、まったく新しい世が来る」

「身分なんかも、無くなりますかね？」

「それはのう……お侍さんたちだけでなく、俺たち百姓も一緒になって戦ったら、百姓の世が来るかもしれん」

虎次郎の考えは、ここまでだったが、洋助の考えは、もっと前に進んでいた。

「俺は、この国は本来俺たち百姓のもんだと思うてます。俺たち百姓が米を作り、年貢を納め、その年貢で領主様たちは生活できる。俺たちが納めた年貢で、この国は動いとる。俺たちが米を作らねかったら、この国は滅びる。この国は俺たち百姓のものなんだ」

洋助は急進的な考えを持っていた。そして、これを可能にしたのが、八衛門の寺子屋教育であった。

ゆきのは、そんな洋助がかっこよく見えてならない。すてきな男性、と、思う。

虎次郎は、江戸の嵐について、くわしく教えてくれた。そして一月ほどたって、その話が終わると、今度は、京へ行く、と言う。

「なんと言っても、天子様のおられるところは、京の都。今は京が沸騰しておる。わしは今度は京へ行って、自分をみがくのじゃ」

それをとらえて、洋助が言った。

「俺も、連れてってくだせえ」

「えっ？ 洋助も都に行きたいんか？」

「そうです。この世が変わろうとしているのに、俺は、こんな片田舎でくすぶっていたくねえです。家の方も、三男の俺がいねえでも、別に困らねえし」

「そうか、だったら、親の許可をもらって来い」

ぬいとその夫は、これを許可した。洋助を自分たちのところにとどめおいても、三男に何をしてやることもできないのだ。それに庄屋様の家の虎次郎様が一緒なら、間違いないだろう、と踏んだ。

おもしろくないのは、ゆきのである。

「あたしも、京へ行ってえて」

と訴える。

「お前はダメだ」

虎次郎が拒否。

「なんでダメ？」

「女の子はダメだ。女は家を守っていなければならぬ。その上、ゆきのは、この家のたった一人の跡取りでねえか。お前のおとっつまやおっか様が許してくれるはずがねえ」

しょんぼりするゆきの。

一の分家の義三郎が口をとがらして怒る。

「ゆきの、お前は俺と夫婦になると決められているんだぞ。それを何だ、洋助なんかについて京へ行ってえのか。お前は洋助とは身分が違うでねえか」

洋助が制した。

「新しい世が来れば、身分などなくなるかもしれん、身分がなくなったら、俺も、お嬢様と結婚できる。そのために、新しい世を作るために、俺は京へ行くんだ」

雪が解け、春になり、虎次郎と洋助とは、人々に別れを告げ、京の都へ向かって旅立った。

## (6) 北越戦争

虎次郎と洋助が京に去って、おおよそ十年の歳月が過ぎた。この間、日本の社会は大揺れに揺れていた。

勤皇か佐幕か、開国か攘夷か。京では政変があいつぎ、薩摩と長州が一連の騒動の真っ只中にあった。この片田舎、越後の長岡にも、その波が伝わっていた。

冬の間、ゆきのは、百姓の娘たちに裁縫を教えていた。これは、母と乳母から教わったものである。

春の初め、夏、秋の終わりと、百姓たちが農作業で忙しいとき、ゆきのは、自家用の縫い物をしていて、いつも着るもののほか、結婚を夢見て、自分の花嫁衣裳も縫い上げていた。花柄の着物に、白無垢のうちかけ。

父母は、早く義三郎を養子に迎えて、ゆきのと結婚させたいとあせっていた。だが、彼女は、それをかたくなに拒んでいた。

彼女は、京へ行く前に洋助がたった一言言った、「身分がなくなったら、俺もお嬢様と結婚できる」という言葉を頼りに、それ一つを信じて、いつまでも彼を待っていた。

待つのは辛くはないが、彼女の父母は、ほとんど困りぬいていた。嫌だと言う娘を、むりやりには結婚させられない。これは時期を待つしかない、と、この親たちは考えていた。

そして洋助はどこでどうしているか、わからない。かいても見当もつかない。わかっているのは、彼が一度も彼女に便り一つくれない、ということだ。当時は飛脚便の制もできていたのに。

で、父親が、

「お前、そんな、文一つよこさないような、京で何をしているやらわからない、そんな薄情男のことはもう忘れろや」

と言っても、娘は、

「虎次郎叔父様も洋助さも、京で忙しゅうて忙しゅうて、飛脚便など考える暇もないんでしょう。あたしは待ってます。ここでも、村中、勤皇、佐幕、開国、攘夷で、沸きかえっておるけれど、あたしの戦いは、ここで、じっと、洋助さを待っていることなんです」

と言って、聞かない。

ここで、情勢は、人から人へと、口伝えで聞こえてくるだけだったが、幕府の権威が弱まり、京の朝廷の力が増してきているのは確かだった。

問題は、京の天子様が徹底的な外国嫌いで、強烈な攘夷派だったことである。幕府は、何とかして天子様に開国を認めさせようと、やっきになっていた。

アメリカだけでなく、イギリス、フランス、ロシア等に国交を迫られ、幕府は、やむなくこれを認めるしかなかったのだ。拒否したら、戦争になり、日本が植民地にされてしまう。

事実、薩摩藩と長州藩とは、それぞれ、外国に攻められ、その圧倒的な武力の前に、敗退していた。これを機に、薩摩、長州も、開国派になっていく。

百姓たちも、「新しい世が来る！」と村中、沸きに沸いていた。どこからか、天子様の世になると、「年貢が半分になる」という噂がどつと流れてきた。

従来の百姓一揆は、世直し一揆と変わって、各地に頻発する。慶応元年（一八六五年）、続いてその翌年（一八六六年）は、凶作だったので、米の値段がどんどん上がった。怒った百姓たちは、町々の米

屋等を襲い、うちこわしをしていた。

大名たちも、困っていた。外国勢力を恐れ、海防を厳しくするよう幕府に要求される。それで農民に夫役を求めても、世直し一揆で拒否され、あちらからもこちらからも攻め立てられる。

慶応三年（一八六七年）は、革命の年である。西日本では、人々が「ええじゃないか」「ええじゃないか」と歌いながら踊りくるい、遊びくるう、「ええじゃないか」運動が勃発していた。

政治の動きがあわただしい。犬猿の仲だった薩摩と長州が秘かに同盟する。幕府軍が二度目の長州征伐に向かう。かたくなに攘夷を主張していた孝明天皇が亡くなる。徳川家の最後の将軍・慶喜が大政奉還をする。王政復古の号令のもと、薩長軍が幕府に戦いを挑む。

若い新天皇のもと、官軍となった薩長軍は、江戸へ進撃、勝利。官軍は、賊軍となった会津藩に進撃する途中、越後長岡に押し寄せてきた。

戦争である。

長岡藩の家老・河井継之助は、なんとか武装中立の道をとろうとしていた。が、日本中が倒幕と開国に沸きあがっているこのとき、長岡藩だけの武装中立など、ありえなかったのだ。

五月。薩長を中心とした官軍が、長岡城を攻略した。越後や東北の他藩も長岡藩に合流し、奥羽越列藩同盟が成立。越後一帯が火の海に包まれた。

長岡の米問屋・鈴正の人たちが、貝喰新田の高橋家に避難してくる。

「もうもう、百姓衆は、世直し一揆でわしら米屋を襲ってくるし、薩長はお城を攻めてくるし、戦争で、もう長岡は火の海じゃ。わしら、命からがら逃げてきましたて」

と、鈴正の主人・日之介が言う。

「まことにもうしわけねえけれど、どうか、しばらくの間、わしらをかくまってくださいませ」

「ほんに大変なことですよ」

高橋家の女主人・よねが、鈴正の人たちをもてなす。

「これからの世の中、俺たちの生活も、どうなるんですかろう？ほんに心配ですよ」

「わしらは、百姓衆が怖おうて、怖おうて。何もあこぎな商売をしていたわけではないんじやが、なにせ、去年、一昨年も凶作で。今年はどうか、まだ、わかりませんが、どうか、豊作であってほしいですなあ。何が怖いとって、凶作のときの百姓衆ほど怖いものはねえです。なんでも天子様の世になったら、年貢が半分になる、と噂がたっておるようですが」

八衛門は、その噂を批判していた。

「お上が一度そんな噂を流したとしても、それが実現する可能性はどうですかろう。日本国は百姓衆の作った米の年貢で成り立っているんで、それが半分になりでもしたら、それこそ、世の中がひっくり返って、收拾がつかなくなりますて」

「そうですか……。その辺のことは、わしらには難しゅうて、よくわからんが、なんでも、皆、新しい世が来るって、歓迎してますな」

「新しい世が来る！」ゆきのは、この言葉を、心の奥でそっと繰り返す。

新しい世が来る……。

洋助さが、帰ってくる……。

戦争が続いている。

貝喰新田のすぐ近くも、戦場になっている。

住民たちは、こわごわ、家にこもって、じっとしていた。恐怖と不安が、交錯する。すぐ近くで戦争の音がする。爆弾の音までです。薩長も、長岡藩も、外国から取り寄せた最新式の爆弾を持っているのだ。それで殺し合いをしている。

強烈な悪臭が、庄屋屋敷にまで流れてくる。戦死者が出て、死体の悪臭がするのだ。

ゆきのは、じっと洋助を待っていた。

と、遠くから、小さく、人の音がする。

「お…じょう…さまあ！」

洋助の呼ぶ声？

弱い、かすれた声。

だが、確かに洋助が自分を呼んでいるのだ。

「洋助さ、どこ？」

ゆきのは外に探しに出る。

「あぶねえ！ ゆきの、家の中にいろ！」

父親の庄太郎が、ゆきのを抱いて止めようとする。

ゆきのは、父の手を振り切って、屋敷の外に出る。

声のする方へ走る。

「洋助さあ！」

「お…じょう…さまあ！」

「洋助さあ！」

「お…じょう…さまあ！」

二人の声が、合致した。

あ、と、目の前に兵士が来て、倒れる。官軍の軍服を着た兵士。

傷ついている。

「あ、あの……」

その手負いの兵士を介抱しようとして、ゆきのは気づく。

「洋助さ！」

洋助だった。

「お…じょう…さまあ！」

声も切れ切れだ。体中傷だらけで、爆弾にもあたったようだ。戦闘で負傷して、洋助はやっと、軍隊から離れることができたのだ。そして自分のところに帰ってきたのだ。

十年も彼を待っていたゆきのだった。

「どうしたん？ 洋助さ。こんなに怪我をして」

爆弾にあたって、死ぬところ、彼はなんとかしてゆきのに会いたいと、がんばって来たのだった。

「俺…死ぬ…前に…なんとか…お…じょう…さまと……」

「死ぬなんて、そんな。そんな、これからあたしたちの幸せが始まるんじゃないの？」

ゆきのは彼を励まそうとしたが、彼は、

「お…じょう…さまあ……」

と、彼女の胸に抱かれたまま、息をひきとった。

若い命が、散っていく。

革命の年、慶応三年は、豊作だった。そして、慶応四年は、明治元年（一八六八年）となる。

会津藩も降伏し、翌年には函館の五稜郭も開城し、ここに官軍に反抗した戊辰戦争も終わりをつげた。名実ともに徳川幕府の時代は終わったのである。

年貢の半減は、すぐに撤回された。

身分制社会も、形を変えて残った。

ゆきのは、一人、気うつ病にかかって、屋敷の中でうつろな瞳でぼんやりしていた。父親も、母親も、怖くて手が出せない。娘をどう扱っていいのかわからないのだ。

義三郎がやってきた。

「ゆきのさ、俺だ」

「……」

「もうええじゃねえか、ゆきのさ」

「何がええのよ、あっちへ行行って」

とりつくしまもない。

何日かたって、老いた八衛門がゆきのの部屋に来た。

「わしはのう、もう年寄りじゃけん、早くひ孫の顔を見たいんじゃあ」

「……」

「考えてもみろ、ゆきの。義三郎はずっとお前への思いに耐えて、男らしく待っていたんじゃぞ。ずっと十年以上、お前を待ち続けていたんじゃ。それは並みの人間にできることじゃねえぞ」

「……」

「いつまでも自分の悲しみに沈んでいねえで、もう目を空けたらどうじゃ？ 死んだものを忍んでも、生きとるもんはずっと、死ぬまで、生き続けなければならんのじゃぞ。これからを明るく生きる、それが亡くなったものへの供養にもなるんじゃ」

八衛門は、こんこんと、孫娘に説いた。老いた祖父として、これが最後のゆきのへの教えだった。